

第23回 基礎情報学研究会開催報告

情報システム学会 基礎情報学研究会

日時：2018年10月27日（土）14時～17時

会場：専修大学神田キャンパス 2号館2階 203教室

出席者：20名

講演の概要

講師：伊藤 耕太先生 （株）博報堂 ストラテジックプランニングディレクター

関西大学総合情報学部／実践女子大学人間社会学部 非常勤講師

講演タイトル：「デジタルは縄文土器の夢を見る

ー基礎情報学から見通す広告ビジネスの危機と未来」

講演内容：

広告業界では、業務がスマート化されてきているが、本来人間が有していた判断能力や感受性で察知できたはずのチェックポイントが素通りされ、炎上が多発している。米国の大統領選挙では、膨大な社会情報を精緻に分析したにもかかわらず、人々の心の中を察知できず、予測をはずしてしまった。ビッグデータはいかに大量でも、実は狭義の情報であり、AIと人類の知性は、決定的に異なっていることを認識しておく必要がある。

縄文土器では、大陸の情報から最も隔絶した関東・甲信から出土した勝坂式に、目覚ましい創造性の発露が見られる。情報量の増大と人間の創造力は必ずしも相関しない。書店が、書き出しの一文のみ示して本を展示したところ、よく売れた上、完読率も高かった。著者が渾身のエネルギーで書きつけた最初の一文が、読者の心を打ったのである。

生命情報を喚起して創造力を発揮するため、三つの実践を提案したい。

第一に、西田哲学やKJ法を再評価し、生命の発する野生の声を「内からの思考」で洞察し、発見する手法を開発することである。

第二に、旅に出る、複数の場で働くなど、当たり前でない環境に身を置き、ワークスタイルの内側に「外からの思考」を埋め込んでいくことである。

第三に、情報があふれる中で、その選択と的確な意味理解など「底からの思考」を可能にするリベラルアーツ能力を開発することである。

生命情報という本来最も豊かな情報が見失われつつある現代社会の危機と、その対応策を、クリティカルな現場業務に携わっている方から直接伺った。情報システム学会としても、情報とは何か、その本質的な意味を再認識することのできた画期的な講演だった。

以上